

違いと差別

越前市武生第二中学校 三年 加茂 絢弓

私の学校にも、外国人の生徒が何人かいる。そのうちの何人かは日本語を話せるが、残りの何人かは話せない。

最近、世界の国際化が進んで、普段の生活でもよく外国の人々を見かけるようになった。しかし、正直言つて、私は外国人が苦手だった。冒頭に書いたような日本語を話せない子とも、去年同じクラスだったが、話すことは全くと言っていいほどなく、転校してきたばかりで心配そうな彼女に「よろしく」の一言もかけられなかった。学校生活での例をもう一つ挙げると、英語を教えて下さる A L T

の先生とも、挨拶が精一杯だった。授業中に単語の発音の仕方を質問してみたこともあったが、最終的に気まずい沈黙が流れてしまった。

しかし、私は最近、そういう「苦手だなあ」という思いも、外国人に対しての差別になってしまっているのではないかと考えるようになった。

きっかけは、父の一言だった。私は他の国、特にヨーロッパあたりの風景が好きで、たまに「世界不思議発見！」などの旅番組を見たり、父が以前撮ってきたドイツの写真を眺めたりしていた。国は好きだが人は苦手、など変な話ではあるが。その日も旅番組を父と二人で見っていた。そんなとき、急に父が口を開き、

「高校受かったら、いつペンドイツにでも行くか。」

と言ったときには、嬉しさが込み上げてきたが、同時に少し心配になってしまった。高校に受かるかどうかではなくて、無事に楽しく海外旅行できるか、にだ。父はドイツ語を勉強中で今までに二、三回は訪れている。しかし、自分が相手の言葉がわからない、というのはとても怖いことだった。

その後、旅行について考えてみた。風景は見たいがその国の人とは話せない。考えているうちに、それはあの転校生の子も同じだったのではないかと、ようやく気付いた。彼女の場合は目的が旅行ではなかっただろうが、日本語を簡単に話

す私たちの中に入るのは、とても辛かっただろう。私は何もしなかった私に後悔し、怒った。

今、私は学校の授業以外でも英語を勉強している。受験のため、というのはもちろんあるが、将来海外に行ったり、外国人と話すため、というのが何より一番の目的だ。大きくなってから言葉を学ぶ、というのはとても難しいが、外国人と友達になつてすらすら英語を話す自分を思い浮かべれば、俄然やる気が湧いてくる。

何か月か前に、自宅の隣の家に、フランス人と日本人のハーフの子が生まれた。先日、その子が水あびをして遊んでいるのを見たが、まるで人形のようにとても可愛らしかった。しかし、あの子が将来幼稚園や小学校へ入り、「ハーフだから」と言つてからかわれるかもしれないと思うと、胸が痛む。

今でも差別は無くなっていない。「違いがあることが問題だ」と本か何かに書いてあったが、私はそうは思わない。大切なのは、「違いがあるのが当たり前なのだから、その違いをその人の魅力として見る」ことではないだろうか。